

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 千曲川のつけば(付け場)
- 今月の一枚
- 矢作川観察ノート(18)
児ノ口公園でアオバズクが巣づくり
- 連載 矢作川のいきもの 2
- 研究所の調査風景

2002 July
No.51

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/yahagi/index.html> e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

* Rioはホームページ上でもご覧になれます

ちくま 千曲川のつけば (付け場)

中本信忠

千曲川の上田から長野にかけて、毎年、4月下旬から千曲川の河川敷には仮設の小屋が40~50軒もできます。つけば小屋といい赤い婚姻色を身にまとったウグイやアユの川魚を料理して食べさせてくれるところです。千曲川の独特な旅情風景として有名です。

千曲川ではウグイ(ハヤ、アカウオ)の産卵期が4月下旬から6月下旬で、魚の産卵習性を利用した漁、つけば(付け場)漁が盛んです。付け場とは、種つけば、産卵場所のことです。ウグイは付着藻類が付いていない礫面に産卵します。ウグイが礫面に産み付けた卵は、1週間から10日で孵化します。

ウグイは、瀬を探して遡上します。瀬では小石が流されます。ウグイは小石が流れる音を遠くからキャッチして瀬を目指して寄ってきます。そこで、この地域の漁師は千曲川に人工的な瀬をつくるのです。人工の瀬の先端には赤い婚姻色をしたオスのウグイを籠に入れておきます。このウグイが尿をし、その臭いと音で赤い婚姻色をしたメスが寄ってきます。そこにオスも

また寄ってきます。人工の瀬を天然の産卵場所と錯覚して寄ってくるのです。そこを投網で一網打尽、産卵期のウグイを捕獲するのです。これを塩焼き、田楽、唐揚げなどにして食べるのです。

この付近には魚が豊富なのです。どうしてそんなに

魚が多いのか?

答えは簡単、河床に魚のエサが多いからです。それは河床の礫面に付着藻類が繁殖しやすいからです。上田から戸倉にかけての河原には直径5センチから20センチ位の礫が多いです。山に囲まれた内陸性の気候で、雨が少ない地域で晴天の日が多いです。河川の水は降雨により濁りにく



つけば

いのです。時々は大雨が降ります。河川は増水することもあります。増水すれば、河床の礫面に発達した付着藻類は流されてしまいますが、すぐに水は澄みます。川沿いの谷間には畑や水田があり、都市もあります。そこから窒素やリンなどの栄養分が河川に流入します。このような河床の礫面には付着藻類が繁殖しやすいのです。つまり魚のエサである藻の繁殖に良い環境なの

で、魚も多いのです。

私の研究室では、大きめの礫を河原から集め、きれいに磨き、河床の瀬に置いて、礫面での藻の発達速度を測定しました。この発達速度は大変に速く、礫を置いてから1週間以内の時期は、藻類量は、1日で倍近くにもなる勢いでした。その結果、きれいに磨いた石は、1週間から10日で周囲の礫と余り変わらなくなりました。やがて、礫面に発達した藻は剥離し始めます。10日から2週間もすると、付着藻類が発達した礫面は魚の食痕が見られるようになりました。

ウグイは付着藻類が発達した礫面に産卵したら、せっかく産み付けた卵が他の魚に食べられたり、付着藻類が剥離するのと一緒に流されてしまいます。そこで、賢いウグイは付着藻類の付いていない礫を探して産卵しようとするのです。千曲川の上田市付近の瀬をよく観察すると、瀬は常に動いています。瀬にある直径20センチもする石の下側は、流れが急になり、小石はコロコロと流されます。やがて、直径10センチ以上もする石も転がり、新しい礫面が上になります。この新しい礫面にウグイは産卵にくるのです。

つけば漁は、江戸時代から続く、この地方独特の漁法です。流れが少しゆるやかなところでは、まや漁という漁法もあります。岸から川中に10メートルほど船着き場みたいな堤防を人工的につくります。その場所の流れが急になり、小石が流され、ある程度大きな礫がでてきます。この礫にウグイは産卵しようと集まってきました。投網をする時には、漁師は小石を少し流します。下流で泳いでいるウグイは、音を聴いて藻が付いていない礫や瀬があると思い集まってきました。そ



まや投網



まや礫

こで、投網でウグイを捕獲します。

これらの漁法は、全国的に見て大変にめずらしい漁法ですが、千曲川上田市付近では現在でも普通に見ることができます。この研究は千曲川生態学術研究として研究しました。

(なかもと のぶただ、

信州大学繊維学部応用生物科学科 教授)

ドクダミ
(二〇〇二年六月四日 田中蕃撮影)



今月の一枚



児ノ口公園で アオバズクが 巣づくり



新見 幾男

豊田市中心市街地の市営「児ノ口公園」に、アオバズクという小型のフクロウがやってきたのは、今年は4月29日か30日頃のことだったらしい。公園ボランティアの杉山亘さんが、その頃にアオバズクの初鳴きを聞いたという。

それから約1カ月後の5月25日夕刻に、豊田市栄町6-5-5の辻寛治さんという人が、公園の木に並んでとまっているアオバズク夫婦を撮影した=写真。左側がメス(実物はドバト大)で、右側のやや小振りの方がオス(キジバト大)であろう。写真からそう直感した。

それから12日後の6月6日、早朝の児ノ口公園を散歩していると、もう杉山亘さんがきていて、手招きで静かにこちらへ来いという合図をしている。杉山さんの頭上の手の届きそうな高さの枝に、小振りの方のアオバズクが単独でとまっていた。逃げようとしないう。

大きい方のアオバズクは3日ほど前に、ムクノキの幹のウロに入ったという。やはり大きい方がメスであり、幹のうんと高いところにあるウロの中で産卵しているという。オスは産卵中のメスがヘビやカラスなどの外敵に襲われないように、見張り番をしているのだろうという。

アオバズクというのは、青葉若葉の頃に南洋の島々から日本に渡ってくるフクロウであり、漢字では青葉梟と書くのだそうだ。ホーホーツ、ホーホーツという独特の二拍子の鳴き声が聞こえるようになると、今年もアオバズクが無事に渡来してきたことを知り、公園ボランティアの人々は、凶暴なカラスが巣づくり中のアオバズクを襲わないように気を配り、ムクノキのウロに人が近づきすぎれば注意をしなければならない。

アオバズクがいつから児ノ口公園へ渡ってくるようになったかは誰も記録していないが、アオバズクのヒナがウロから顔を出しているのを発見されてからもう



アオバズク

4~5年になると思う。いまやアオバズクは公園内の矢作川水系・五六川のゲンジボタルと並ぶ、市街地の近自然公園のシンボルの存在だ。6年前の公園の近自然化によって、この鳥のエサであるらしいセミ、ガなどの大型昆虫やカエルなどが殖えなければ、毎年の渡来は続かなかったかもしれない。それにアオバズクは古木のウロ、つまり巣穴がなければ、子育てはできない。アオバズクの存在は児ノ口公園の貫禄を大いに高めたといえる。

実は巣穴のウロのあるムクノキは、児ノ口公園のものではない。公園と一体利用されている児ノ口神社の古木の中の1本である。この朝も神社のお役の2人が清掃に来ていて、「こちらの地味な奉仕活動にも注目してもらわなければ…」と言っておられた。私は「公園の若木があるだけではアオバズクは来ませんよ」と言っておられるのだと受け止めた。

アオバズクのヒナが巣穴から出て、親鳥と並んで古木の枝にとまるようになるのは7月のことだろうが、今年は何羽のヒナが巣立つのだろうか。杉山亘さんが過去の例を話すには、1羽だけだった年もあれば最高4羽だった年もあり、予測はできないそうだ。親子は公園内にいるうちに離れて別行動するようになり、9月末には南洋方面に去っていくという。

そういう生態観察記録や映像記録が残されるようになれば、アオバズクというフクロウの棲む近自然公園は、市街地の子どもたちの自慢話のタネになり、市民の愛鳥精神を大いに高めることになるだろう。

(にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事、
豊田市矢作川研究所 幹事会議長)

決闘! クマバチ対オオサムシ

田中 蕃

自然界ではとんでもないことが起こっている。そういう認識はつねづね持っているつもりであるが、なぜか自分の常識の枠を外れる出来事に、ひどく驚くことがある。だから自然は楽しい。一例を紹介しよう。

飯野川の支流に上海道川という小川がある。この源流に近い一帯を調査したときのことだが、山裾の路傍で突然異様な羽音がして、地上で黒い塊が激しく動いた。一瞬何が起こったのかと思った。よく見ると羽音の主はどうやらクマバチらしい。しかしクマバチ同士の争いではない。瞬間カメラを構えてシャッターを押したが、フィルムの最後の1枚だったので、交換に手間取り、連続的に撮影ができなかった。

クマバチの相手は甲虫である。甲虫も激しく噛みついていて相手を放さない。クマバチが大型の甲虫を狩るという話など聞いたこともないので、この決闘にはいささか興奮を禁じ得なかった。と、まもなく両者は離れた。クマバチは巣に戻らず飛び去り、残された甲虫はオオオサムシと判明したが、道を横切り草むらに姿を消した。回りはやけに静寂になった。

思えばほんの1～2分前、切り崩した斜面の路傍に



からみ合って相手を攻撃するクマバチ(上)とオオオサムシ(下)
1996年9月20日 豊田市西広瀬町 筆者撮影

クマバチが飛んで来て姿を消した現場での出来事である。オオサムシは肉食性だ。巣に戻ったクマバチとの遭遇がどういう状況で起こったのかは想像するだけだが、クマバチが巣に戻った瞬間、オオサムシは見境なく相手を襲ったのかもしれない。あるいは単独生活を営むクマバチの留守中に、巣に入り幼虫などを食べていたが、帰ってきた親バチに見つかり、攻撃されて決闘状態になったのかもしれない。

写真では、クマバチの羽は相当傷んでいるが、オオサムシの頸部か胸部の節間に針を刺しているように見える。オオサムシは最初はクマバチの胴部を噛んでいた。撮影時にはどうやら脚に噛みついていているらしい。危険回避のために備わっているであろう、オオサムシ特有のあの嫌な臭いは、回りに漂っては来なかった。

その後両者はどうなったのか。今も気掛かりで、想像を巡らせては、あれこれ楽しんでいる。

(たなか ばん、豊田市矢作川研究所 研究顧問)

研究所の 調査風景

5月27日(月)

アユ釣りの解禁を6月8日にひかえ、アユの生息状況をつかむために、豊田市内から上流の小渡(旭町)にかけて潜水による目視観察を行いました。アユの食み跡はまばらにはありましたが、肝心のアユの姿はほとんど見られませんでした。糸状藻類も春の増加の時期を迎えており、釣果がど

うなるかやや心配です。
(山本)

6月3日(月)

ヒメボタルの分布調査のため昆虫公園と樹木神社を回りました。こ

の日は残念ながらヒメボタルは見つかりませんでした。これまでの数回にわたる調査で、少なくとも市街化地域内に残された林の3箇所からヒメボタルが見つかっています。またその他にカブトムシやクワガタムシ類が数多く生息することも判明しました。このような自然豊かな林が都心部に残っていることをあらためてう

れしく思うと同時にそれを後世に伝えることが我々の使命と思えました。(間野)



ヒメボタル

6月15日(土)

太田川でボタル観察会をしました。愛護会、子供会と当研究所から総勢30人近くが集い、太田川沿いを散策しました。ハイケボタルがたくさん飛んでいました。ゲンジボタルも僅かですが見る事ができました。ボタルの光を見つけるたびに子供たちは大喜びでした。(内田)

編集後記

今年のアユの遡上推定数は5月末で約22万匹、関係者からは安堵の声も聞こえていました。矢作川の解禁日も例年より一足早く6月8日でした。しかし、解禁初日の釣果は、ワールドカップ観戦の歓声とは裏腹に、釣り師の期待に答えるものではなかった模様です。おまけに、冷水病と思われるアユがあちこちで目撃されたことも気がかかります。(内)

ご意見・ご感想をお寄せください